

ヨハネによる福音書 7:14-36；「祭りの場における誤謬」——2026年8月30日

I. 歓迎と振り返り

A. おはようございます！おはようございます！カルバリー・チャペル岩国へようこそ。教会の家族として集い、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストを礼拝できることは、なんと大きな祝福でしょう。

1. 初めてお越しの方、そしてオンラインでご視聴の皆様、ようこそ。

B. 今朝は、子供たちを解散させる前に、数分間を割いて、私たちの姉妹であるミカ・ミゲル（メイメイ）さんのために祈りたいと思います。ミカさんはこの1年間（8ヶ月間）、ここカルバリーでインターンとして働いてきましたが、まもなくフィリピンへ帰国することになります。

1. この期間、彼女と共に過ごせたことに感謝するとともに、主の導きにより、将来また共に奉仕できる機会を楽しみにしています。

2. 今週の日曜日は、当面の間、彼女が私たちと共に過ごす最後の日となります。そこで、彼女自身と、フィリピンへの帰路、そして主がそこで彼女のために用意してくださっているすべてのことを祈りたいと思います。

3. （マイカ［メイメイ］さんに立ち上がってもらい、リーダーたちに祈りを依頼します。）

C. 皆さんが席に戻られる間に、子供たちも日曜学校の教室へ送り出しましょう。

1. （第2礼拝：聖書英語クラスも同様）

D. 子供たちが教室へ向かう間、残りの皆さんは聖書を開き、ヨハネによる福音書第7章を開いてください。

1. 先週は、第7章の冒頭部分を取り上げ、エルサレムで仮庵の祭りの初めに、神殿で高まっていた緊張感について学びました。

2. 数十万もの人々が、定められた祭りを守るためにエルサレムの街に詰めかけ、誰もがイエスのことを思い、すべての目がイエスを探し求めていました。

3. 群衆の中には、イエスを「善良な人」だと考え、彼が本物であると信じていた人々もいました。一方で、それとは反対に、「いや、彼は善良な人ではない。彼は欺く者であり、人々を惑わしている」と言う人々もいました。

4. 宗教指導者たちは、イエスが自分たちにさらなる問題を引き起こす前に見つけ出して逮捕しようと、目を凝らしてイエスを探していましたが、どこにも見当たりませんでした。

5. 多くの人がイエスを探し、ほぼ全員がイエスのことを話題にしていたが、それでも、宗教指導者たちへの恐れや、イエスに味方した者に対して彼らが何をするか分からないという不安から、場の雰囲気はかなり沈んでいた。

6. 彼らは、イエスやイエスに味方する者を捕らえる準備を整えており、イエスの側に立つ者は誰でも破門するとすでに決めていた。「キャンセル・カルチャー」が全盛期を迎えており、イエスと関わりのある者は誰でもブラックリストに載せられることになっていた。

E. 今朝の聖書の箇所では、仮庵の祭りの半ば頃に何が起きたのかを見ていきます。まさにこの時、イエスはご自身を現し、神殿に入って人々に教えを説かれたのです。

1. そしてその後起こったことは、数多くの誤った前提や誤った結論が混在する中で、イエスが人々に至った多くの誤謬を論破するものでした。

2. メモを取られる方のために、今回の学びのタイトルは「祭りの時の誤謬」とします。そして、今朝の聖書箇所はヨハネによる福音書第7章14節から36節です。

3. この箇所を読み進めていく中で、さまざまな人々のグループが至った数々の誤謬と、イエスがそれらの一つひとつにどのように応答されたかに注目していきます。その過程で、イエスが宣言された真理に基づいて、私たち自身の生活にどのように適用できるかについても考えていきます。

F. すでにヨハネによる福音書第7章を開いておられることを願っています。もしそうであれば、神と神の聖なる御言葉に敬意を表して、立ち上がることができる方は全員、立ち上がっていただけますようお願いいたします。

1. まず、本文全体を読み上げ、その後、この学びの時間を通して神が私たちを導いてくださるよう祈りましょう。

2. 本文は少々長めですので、私が聖書を読み上げる間、皆様もご自身の聖書に目を通して、できるだけついてきてください。ヨハネは、仮庵の祭りでそこで何が起こったかについて、14節で次のように詳しく述べています……（朗読と祈り）

II. ヨハネ7:14-15；人々はイエスを無学だと思っていた

A. この聖書の箇所は、祭りが始まってから数日が経過していることを告げて始まります。先週のメッセージでは、仮庵の祭りの初めに何が起こったかを見てきました。今日の聖書の箇所は、それから数日後の出来事を扱っています。

1. ヨハネは、それが祭りのちょうど中頃だったと記しています。仮庵の祭りは一週間にわたる祭りであり、8日目に聖なる集会をもって最高潮を迎えました。したがって、祭りの「中頃」とは、おそらく祭りの4日目あたりを指すのでしょう。

B. そして、この日、イエスはもはや身を隠すことをやめ、神殿に入って人々に教え始めようと決心されたのです。

1. それ以前、イエスは、すでに自分に向けられている注目以上に注目を集めたくないと考え、人目につかないように、ひっそりとエルサレムにいられていました。

2. しかし、今こそ前に出て、人々に語りかける時が来たのです。

C. そうすると、人々は驚嘆しました。

1. 人々は、イエスの教え方に驚き、感嘆し、畏敬の念を抱きました。

a. イエスに関して、このようなことが起こったのはこれが初めてではありませんでした。地上の宣教活動を通じて、人々はしばしばイエスの教えや、その権威ある語り方に驚嘆していました。

b. マタイによる福音書第7章で、イエスが有名な「山上の説教」を語られた際、人々はイエスの教えに驚嘆しました。それは、イエスが「律法学者たちとは違って、権威ある者として」彼ら

に教えられたからです。(マタイ7:28-29)

- C. マルコの福音書には、ある安息日に地元の会堂で、人々がイエスとその教えにどう反応したかが記されています。「多くの人々がイエスの言葉を聞いて驚き、『この人は、どこでこのようなことを学んだのか。また、この人に与えられたこの知恵とは何なのか。その手によって、このような力ある業が行われているのだ』と言った。」（マルコ6:2）

2. イエスの教えは、人々がこれまで聞き慣れていたものとは全く異なっていた。

- a. 人々は、ラビたちが他のラビの言葉を引用し、「ラビ・ヒレル曰く...」「ラビ・シャマイ曰く...」「ラビ・ガマリエルの教えによれば...」といったことを言うのに慣れていましたが、イエスの教え方は違っていました。
- b. イエスはこう言われました。「『昔の人々にこう言われたと、あなたがたは聞いたことがある...しかし、わたしはあなたがたに言う.....』」
- c. 「あなたがたは、古の人々に『殺してはならない』と言われたことを聞いたことがある.....しかし、わたしはあなたがたに言う。理由もなく兄弟に怒る者は、裁きを受ける危険にさらされる。」（マタイ5:21-22）
- d. 「『姦淫してはならない』と、古の人々に言われたことを、あなたがたは聞いた。しかし、わたしはあなたがたに言う。女を見て、彼女を欲情する者は、すでに心の中で彼女と姦淫を犯したのである。」（マタイ5:27-28）

3. 当時の教師たちが教えるときは、権威ある者たちの言葉に基づき、著名なラビたちの言葉を引用して教えていました。しかし、イエスはご自身の言葉をもって人々に悔い改めを命じ、権威をもって教えられました。

D. それゆえ、人々はイエスに驚嘆した一方で、同時に戸惑い、困惑していた。そして、ここから最初の誤謬が浮かび上がる。

1. 人々が困惑し、戸惑ったのは、他のラビたちの教えを受けていない者が、これほど権威を持って教えることができるとは考えられなかったからである。
2. 彼らには、人気のあるラビたちが弟子たちを集めて、自分たちの教えを説く学校がありました。そして、彼らは、ラビたちから何らかの正式な訓練を受けずに、イエスが教えたような教え方をすることが不可能だと考えていました。
3. このことは、人々の驚きと感嘆をさらに深める結果となった。正式な訓練を受けていないのに、どうしてイエスはあれほど力強く教えることができたのだろうか？

E. 彼らの思い込みは、イエスには指導する者がいなかったか、あるいは権威ある人物から教えを受け継いでいないというものでした。しかし、事実は全くそうではありませんでした。16〜19節で、イエスが彼らの誤った考えにどのように応答しているかを見てください。

III. ヨハネ7:16-19；イエスの教えは父から来たものだった

A. 人々は、イエスに正式な教育を受けていない、あるいは権威ある人物から教えられていないと誤って思い込んでいたため、イエスの教えに驚嘆しましたが、イエスはこう答えられました。「わたしの教えは、わたし自身のものではなく、わたしを遣わされた方のものである。」

1. 「わたしの教えは、わたし自身のものではありません。わたしを遣わされた方から与えられたものです」とは、この世で最高の権威である父なる神を指しています。

B. そして、イエスは、それが父からのものであることを知る方法はどうだと語られます。もし誰かが御心（すなわち父の御心）を行うことを望むなら、その教えが神からのものであるか否かを悟るでしょう。私が神を権威として語っているのか、それとも自分自身を権威として語っているのか、ということです。

1. 注目すべきは、「御心（すなわち父の御心）を完全に守る者」とは書かれていない点です。そうでなければ、私たちのうち誰も、あることが主から来たものかどうかを証しすることはできません。
2. しかし、ここには「御心を行うことを望む者」とあります。御心を行うことを切望する者こそが、それを知るのです。あなたの心の願いが、父の御心を行い、御言葉を実践することにあるとき、何が主からのもので、何がそうでないかを知ることになります。あなたは、あることが神からのものであるかどうかを見分ける霊的なレーダーを身につけることになるのです。
3. もし誰かが、神の御心を行い、御言葉に従い、それを実践することに真に関心を持っていないなら、その人は闇の中に留まり続けるでしょう。
4. しかし、心から主を敬うことを願い、単に父の御心を知るだけでなく、実際に父の御心を行うことを望む人こそ、そのことが主から来たものかどうかを見分けることができるのです。
5. あなたの意志が父の御心と一致しているとき、イエスのメッセージの真理は明白で、否定できないものとなるでしょう。
6. だからこそ、宗教指導者たちはイエスの教えを受け入れなかったのです。彼らの心が父と一致していなかったからです。彼らの意志は、父の御心を行うことではなく、自分たちの意志を通すことでした。彼らは権力と権威を維持し、自分たちのやり方で物事を進めたかったのです。威信を保とうと努め、すべてが自分中心でした。彼らは全く主に身を委ねていなかったのです。

C. そして、そこから、イエスの教えが主から来たものかどうかを見分けることができる、もう一つの方法へとつながります。18節を見てください。イエスはこう言われました。「自分から語る者は、自分の栄光を求めます。しかし、自分を遣わした方の栄光を求めるとは、その人は真実であり、その人には不義が一切ありません。」

1. 自分の栄光を求め、自分の権威に基づいて語る者は、父から来た者ではありません。その者は詐欺師であり、偽者であり、見せかけの者です。
- a. これは、イエスが宗教指導者たちに対して抱いていた批判です。ヨハネの福音書のこれまでの学びの中で、イエスは彼らが自分の栄光を追い求めていることを具体的に指摘し、「互いに栄誉を受け合い、唯一の神から来る栄誉を求めないあなたがたが、どうして信じることができるのか」（ヨハネ5:44）と問いかけました。
- b. 宗教指導者たちは、人々からの称賛を愛し、人々の間で尊敬されることを望んでいました。マタイによる福音書23章によると、イエスはこう言われました。「彼らの行うすべての行いは、人に見られるためである。彼らはテフィリンを広くし、衣のふちを長くする。また、宴会での上座、会堂での最前列の席、市場での挨拶、そして人々に『ラビ、ラビ』と呼ばれることを好む。」（マタイ23:5-7）
- c. ヨハネはこの福音書の後の箇所で、「彼らは神の賛美よりも、人の賛美を好んだ」と記している。（ヨハネ12:43）

2. 真に本物の教師とは、自分自身ではなく、父を栄光に帰することに全力を尽くす者です。父から遣わされた真の教師は、主を栄光に帰しようと努め、その言葉は真実であり、その行いは父にかなうものであり、その人には不義は一切ありません。
 3. あることを教えながら、実際には別のことを行うといった、いかなる偽善もその生涯には存在しない。その言葉は、その行いと一致している。
 4. 繰り返しになりますが、これこそが、イエスが宗教指導者たちに対して抱いていた不満でした。イエスは彼らをしばしば「偽善者」と呼びました。彼らは人々の前に立ち、あることを教えながら、実際にはその正反対のことを行っていたのです。
 - a. 後にイエスは、宗教指導者たちについて人々に警告し、「彼らが守るようにと言うことは、すべて守り、行いなさい。しかし、彼らの行いには従ってはならない。彼らは言うだけで、行わないからである。」(マタイ23:3)と語られる。
 5. ここでイエスは、祭りのために各地からエルサレムに集まった大衆、すなわち群衆に語りかけていますが、その教え全体を通して、イエスの言葉は特定の集団に向けられているように見えます。イエスは群衆に語りかけていますが、明らかに宗教指導者たちを非難しているのです。
- D. だからこそ、19節で、モーセが彼らに律法を与えたにもかかわらず、彼らが律法に従わず、守らなかったという非難をなされているのです。
1. そして、イエスは彼らの陰謀を暴き、イエスを殺そうとする彼らの企みや意図を皆に知らしめます。モーセは明確に「殺してはならない」と命じています。これは第六の戒めです。(出エジプト記20:13) それにもかかわらず、彼らは今ここで、イエスを殺害する方法を計画し、策を練り、模索しているのです。
- E. 群衆がイエスに反応する様子が記されている20節を読んでみましょう。

IV. ヨハネ7:20；人々はイエスが錯乱していると思った

- A. この箇所を読むにあたり、イエスがかなり大勢の人々に向かって語っていることを理解しなければなりません。
1. この群衆の中には、祭りのために遠くからやって来た人々もいます。彼らはユダヤ人ですが、地元の人々ではありません。
 2. また、ユダヤ人でエルサレム出身の人々もいます。彼らは地元の人々であり、単にエルサレムを訪れている人々よりも、エルサレムで起きている出来事についてはかに詳しいのです。
 3. さらに、この群衆の中に混じっている宗教指導者たちとその手下たちもあり、彼らはこの時点に至るまで、イエスを執拗に追跡し続けていた。
- B. イエスの言葉は間違いなく宗教指導者たちに向けられたものでしたが、群衆はイエスが自分たちに話していると思ひ込み、イエスは妄想に囚われているという結論に至りました。
1. 彼らが「お前は悪霊に取りつかれている」と非難したとき、必ずしもイエスが悪霊に憑依され、悪霊の力に支配されていると言おうとしたわけではありません。

- a. これは、宗教指導者たちがイエスについて主張しようとしていたことである。彼らがイエスの行った奇跡やしるしを否定できなかったとき、彼らに残された唯一の手段は、イエスの力が悪魔から来ていると主張することだった。

2. しかし、ここではそのようなことは起きていません。この表現は当時の一般的な慣用語であり、基本的には誰かを「頭がおかしい」あるいは「妄想に囚われている」と呼ぶために使われていました。
3. 彼らは正気を失っており、正常な判断ができず、悪魔に取り憑かれた者の兆候や証拠を見せている——とはいえ、以前の宗教指導者たちのように、それを明示的に言っているわけではない。
4. これが、この集団が陥った第二の誤謬である。彼らは、イエスが「自分たちはイエスを殺そうとしている」と主張されたことから、イエスが妄想に陥っていると考えるのである。
5. しかし、彼ら自身はそのようなことを計画していたわけではなく、また、エルサレムの宗教指導者たちの陰謀や策略について、外部の者たちは知る由もなかったのです。
 - a. しかし、この箇所の後半、25節を見ると、実際にエルサレムから来たユダヤ人たちは、イエスの主張が真実であることをよく知っていたことがわかります。彼らは、イエスがそう言ったからといって、イエスが狂っているわけでも、妄想に囚われているわけでもないことを知っていたのです。
 - b. 25節に登場する人々は、宗教指導者たちがイエスを殺そうとしている陰謀を知っていましたが、20節に登場するこれらの人々はそうではありませんでした。彼らは、自分たちがイエスを殺そうとしているなどと言うイエスを狂人だと思っていました。なぜなら、彼らにはそのような意図がまったくなかったからです。実際、彼らの多くはイエスを善良な人だと考えており、その週の初め、他の人々がイエスを悪者だと言っていた時に、「彼は良い人だ」と言ってイエスを擁護していたと断言しても差し支えないでしょう。

C. 21～24節で、イエスがこの誤った考えをどのように論破されたかを見てみましょう。

V. ヨハネ7:21-24；イエスは彼らの判断の矛盾を暴いた

- A. 21節は、「イエスは答えて、彼らに言われた」という文で始まります。しかし、「彼ら」が具体的に誰を指すのかは明記されていません。文脈から判断すると、イエスは群衆に向かって声高に語っている一方で、この言葉を口にする際、その視線は宗教指導者たちをまっすぐに捉えていたと結論付けても差し支えないでしょう。
- B. イエスは、自分が狂人であるという主張を反駁するために、宗教指導者たちがなぜ自分を軽蔑し、殺そうとするに至ったのか、そのきっかけを極めて明確に示しています。
1. イエスは、前置きや限定条件を一切付けずに、ご自身がなされたある「業」について言及していますが、文脈から判断すると、それは一年以上前にエルサレムにおられた際、ベテスダの池で癒やしを待っていた麻痺した男に出会った時の出来事を指していることがわかります。
 2. ヨハネの福音書の学びを思い出していただければ、この出来事はヨハネによる福音書第5章で詳しく取り上げたことをご記憶でしょう。イエスはユダヤ人の祭りの一つに参加するためにエルサレムに滞在しており、その際、38年間も病に苦しんでいた、癒やしを待ち望んでいた一人の男に近づかれました。

a. イエスはその人に近づき、「治りたいか」とおっしゃいました（ヨハネ5:6）。

- b. その男は、癒しの水に間に合わないといった言い訳をしました。その時、イエスは彼を見つめて、「起き上がり、床を担いで歩きなさい」と宣言されました。（ヨハネ5:8）
- c. その男は即座に癒やされ、イエスの指示通りにした。彼は立ち上がり、寝床を拾い上げ、その場を立ち去った。しかし、ただ一つ問題があった。その日は安息日だったのだ。
- d. そこで、宗教指導者たちは、寝床を手を持って歩いているその男を見ると、安息日に寝床を運ぶのは律法に反すると激しく非難した。
- e. その男は、自分がどのようにして癒やされたか、そして自分を癒やした人が「起き上がって、寝床を担げ」と言ったことを証言した。宗教指導者たちが、誰が彼を癒やし、寝床を担ぐように言ったのかと尋ねると、その男は正直に、その人が誰なのかは分からないと告白した。
- f. その後、イエスは癒やしたその男と再会し、ご自身が誰であるかを告げ、もう罪を犯さないようにと命じました。
- g. イエスこそが自分を癒やした方だと知った後、その男は宗教指導者たちのところへ行き、自分を癒やしたのはイエスであると証言した。
- h. そして、ヨハネによる福音書第5章16節には、「イエスが安息日にこのようなことをされたので、ユダヤ人たちはイエスを迫害し、殺そうとした」と記されています。（ヨハネ5:16）
- i. その後、イエスは宗教指導者たちから安息日の癒やしについて問いただされましたが、イエスの答えは基本的に、「私はただ、父がなさっている業をしているだけだ」というものでした。
- j. 18節には、「それゆえ、ユダヤ人たちは、イエスが安息日を破っただけでなく、神を自分の父と呼び、自分を神と等しい者としたので、なおさらイエスを殺そうとした。」と記されています。（ヨハネ5:18）
3. つまり、これが本文の中でイエスが言及している出来事である。その「一つの業」とは、安息日にその男を癒やしたことである。
- C. その後、イエスは安息日に行ってもよいとされていた他の行いを挙げ、彼らの判断の矛盾を浮き彫りにしました。彼らは主を敬い、正しいことを行うために他の事柄については容認していたのに、なぜ今、イエスに対してはそうしないのか、と問いかけたのです。
1. イエスが挙げた例は、割礼です。
 2. 割礼はモーセの律法に含まれていましたが、実際にはモーセや律法よりも以前から存在していました。割礼は、創世記17章にさかのぼり、主との契約関係のしるしとして、アブラハムや先祖たちに与えられたものでした。
 - a. その契約の内容は、アブラハムのすべての子孫である男子は、生後8日目に割礼を受けるというものでした。（創世記17:12a）
 - b. これは彼らにとってのしるしとなることを意図したものでした。主との契約関係、そして主がアブラハムとその子孫に与えられた約束を、絶えず思い起こさせるためのものだったのです。

3. しかし、ここで問題となるのは、神がイスラエルの民に、⁹後8日目に息子たちに割礼を施すよう命じられたものの、もしその8日目が、いかなる労働もしてはならない安息日だった場合はどうなるか、ということです。
 4. 割礼には労作が伴いました。そこには、イスラエルの民が安息日に禁じられていた複数の行為が含まれていたのです。
 5. しかし、ユダヤ人たちは、8日目に割礼を行うという神の命令を尊ぶために、安息日を破ってもよいと正しく判断しました。彼らは、ある律法を別の律法よりも優先させましたが、それは当然のことでした。
 6. イエスは、宗教指導者たちとその二重基準を厳しく非難しています。イエスは、「より軽微な事柄からより重大な事柄へ」という視点から論を展開しています。ある規則が些細な事柄や軽微な事柄に適用されるのであれば、より重大な事柄や重要な事柄にはなおさら適用されなければならぬのです。
 7. イエスは基本的にこう論じているのです。「安息日に肉体に害を与え、赤ん坊を痛みのあまり泣き叫ばせることは許されるのに、安息日に肉体を癒やし、誰かを大きな喜びのあまり叫ばせることは許されない、などということがあるでしょうか？」
 8. どうして安息日には一方を行ってもよく、もう一方は行ってもいけないのでしょうか。もし安息日に肉体に害を与えることが許されるのなら、肉体に癒やしをもたらすことは、なおさら歓迎されるべきではないでしょうか。
- D. ユダヤ人たちは、安息日の真髄を見ずに、外見だけで判断している。確かに、イエスは安息日に業を行われた。しかし、安息日は人のために設けられたのであり、人が安息日のために設けられたのではない。（マルコ2:27）
1. 安息日は、人に休息と活力を与えるために与えられたものです。38年間も抱えてきた病から人を解放し、完全な状態へと導くことほど、素晴らしいことがあるでしょうか？それを実行するのに、安息日ほどふさわしい日があるでしょうか？
 2. 彼らは外見にばかり囚われすぎて、安息日の真髄そのものを見失っている。そして、それこそが、イエスがここで指摘している点である。
 3. これらのユダヤ人たちは、イエスが安息日に人を癒やし、完全に健康にさせたことに怒りを抱いている。彼らの判断は全く理にかなっていない。
 4. だからこそ、イエスは24節で、外見に基づいて裁くのをやめ、義に基づいて裁き始めるよう彼らに告げているのです。重要なのは体裁を保つことではなく、正しいことを行うことなのです。そして、これらの宗教指導者たちは、この点において完全に的を外していたのです。
- E. 25～27節を見てみましょう。そこでは、群衆の中から現れた新たなグループによる、さらに別の誤った主張が指摘されています。25節……

VI. ヨハネ7:25-27；人々はイエスを知っていると思い込んでいた

- A. 先ほど述べたように、25節に登場するこの人々のグループは、イエスが語りかけているより大きな集団の中の、より小さな一派です。彼らは地元の人々です。祭りのために神殿にやって来てはいますが、エルサレムに住んでおり、世間の動向に敏感で、何が起きているか、また宗教指導者たちがイエスに対してどの

ような見解を持っているかについて、よく把握していました。

B. エルサレムから来たこれらのユダヤ人たちは、イエスが公然と説教しているのを耳にし、「
この人は、

- 「この男は、宗教指導者たちが殺そうとしているあの男ではないか？ なぜ彼らは彼を捕らえないのか、なぜ公然とここで説教させているのか？」
- C. 彼らはこう疑問に思いました。「指導者たちはこの男について、別の結論に達したのだろうか？ 考えを変えて、彼が真のキリストだと認めたのだろうか？ まさか、そんなはずはない。」それが彼らの考えでした。
1. これは、ここに使われているギリシヤ語の文法からわかります。彼らの問いかけは、否定的な答えを前提としています。「まさか、この男について考えを変えたなんてことはないだろう？」
- D. そして、彼らがこのように考える理由は、彼ら自身が、この方がメシア、すなわちキリスト、油注がれた方であることを信じていないからです。彼らは独自の判断を下しており、その考えに基づけば、この男がメシアであるはずがないと結論づけているのです。
1. そして、彼らの誤った結論は、次の二つの点に基づいています。
- a. 第一に、イエスが誰であり、どこから来たのかという、自分たちの思い込みに基づく知識です。
- b. そして第二に、彼らは聖書の明確な教えよりも、人間の伝統に基づいて判断しているのです。
2. 説明しましょう。これらのユダヤ人たちは、イエスが誰であるかを知っていると思い込んでいます。彼らはイエスを見て、大工の息子に過ぎないとしか見ていません。「彼はナザレのイエスだ。我々は彼を知っている。彼の母も父も知っている。兄弟や姉妹も知っている。この男がメシアであるはずがない。」
- a. イエスに対する親しみや、その生い立ちの一部を知っていることから、彼らはイエスが特別な人物ではなく、メシアであるはずがないと信じ込んでしまうのです。
3. さて、伝統と彼らの誤った結論について言えば、この時代には、ラビの伝統に基づく一般的な信念があり、メシアが現れるときは、どこからともなく現れるものだと考えられていたのです。
- a. まるで、危機一髪時に現れて事態を救い、イスラエルの民を束縛から解放する、輝かしい鎧をまとった騎士のように、そして驚くべき軍事指導者として登場するというのです。
- b. 事態が最悪の局面に達した時に現れて、危機を救うスーパーヒーローのような存在です。「見て！ 空の上だ！ 鳥か、飛行機か、いや、メシアだ」というような発想です。
- c. 人々は、この伝統がマラキ書3章1節のような聖書の箇所由来だと信じています。そこには、「見よ、わたしはわたしの使者を遣わす。彼はわたしの前に道を整える。そして、あなたがたが求めている主は、突然、その神殿に來られる」（**マラキ3:1a**）とあります。
- i. 人々は、「突然、神殿に來られる」という最後の部分に注目し、主がどこからともなく現れるだろうと結論づけた。しかし、その節の冒頭には、誰かが主より先にやって来て道を整えることが記されており、主がどこからともなく現れるスーパーヒーローのような存在として來られるわけではないことが示されている。

- d. また、イザヤ書53章の8節の冒頭には、「彼は牢獄から、裁きから連れ去られた。誰が彼の系図を告げようか」（**イザヤ53:8a**）とあります。
- i. 「その系図を告げる者がいない」というこの一節は、誰も主のことを知らないだろうという意味だと解釈されてきました。
- ii. しかし、その節が語っているのは、そのようなことはありません。その節を読み進めると、「彼は生ける者の地から断たれた。わが民の背きのゆえに、彼は打たれた。」（**イザヤ53:8b**）とあります。
- iii. 「その系図を告げる者がいない」という考えは、明らかに、彼が「生ける者の地から断たれる」という事実に基づいており、彼が知られていないということではない。
4. そこで、メシアとは誰も知らない人物であり、予告なしにどこからともなく現れて事態を救う存在である、と教えるラビの伝統が存在していました。
5. それは空想的で刺激的に聞こえるかもしれませんが、聖書とは一致しません。賢者たちがイエスを探しに来たとき、彼らはヘロデ王に、キリストがどこで生まれるのか、どこから来るのかと尋ねましたが、当時のすべての宗教指導者たちは、彼がどこから来るのかを正確に知っていました。彼らはこう答えました。「ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう記されているからです。『しかし、ユダの地にあるベツレヘムよ、あなたはユダの支配者たちの中で最も小さい者ではない。あなたから、わたしの民イスラエルを牧する支配者が現れるからである。』」（**マタイ2:5-6**）（ミカ書5:2より引用）
6. 「彼はどこからともなく現れ、無名の存在となる」という伝承は、聖書が教える内容と一致していませんでした。聖書は、彼がベツレヘムから來ること、ダビデの子孫であること、そして彼の到来に向けて皆を準備させるために道を整える先駆者がいることを明確に示していました。
7. メシアがどこから來るのか、また誰が彼の道を整えるために來るのかという神の御言葉を聞く代わりに、彼らは聖書に漠然と基づき、文脈から完全に切り離された伝統に固執してしまっ
8. 彼らの伝統ゆえに、彼らは自分たちのメシアを拒絶しました。なぜなら、彼は危機を救う英雄のように、どこからともなく現れたわけではなかったからです。彼らはイエスを知っており、よく馴染みがあったため、イエスが自分たちのメシアであるはずがないと考えたのです。
- E. 28節と29節で、イエスがどのように応答されたか見てみましょう。

VII. ヨハネ7:28-29；彼らは父を知らなかったため、イエスを知ることができなかった

- A. この箇所で「イエスは声を張り上げて叫ばれた」とあるのは、非常に描写的な表現です。それは、大胆で、声高に、喉の奥から響くような宣言でした。
1. もし誰かの注意が散漫になっていたり、誰かが居眠りし始めていたとしても、このイエスの叫びによって、彼らは即座に注意を喚起されたのです。

B. そして、この宣言は圧倒的に「聖なる皮肉」として解釈されています。一部の翻訳では、これを断定よりもむしろ疑問文として訳しているものさえあります。「あなたがたは、わたしを知っているし、わたしがどこから来たのかも知っているのか？」

1. まるでこう言わんばかりです。「そうか、お前たちは私を知っているし、私がどこから来たのかも知っていると知っているのか？ 私をただのナザレのイエス、大工の息子だと思っているのか。お前たちは何も分かっていない。私は自分の意思でここにいるのではない。お前たちが知らないお方によって遣わされたのだ。」これこそが、この聖句から読み取れる口調のようです。

C. エルサレムから来たこれらのユダヤ人にとって、イエスはガリラヤ地方のナザレという町出身の、貧しい大工の息子に過ぎませんでした。しかし、イエスは決してそのような存在ではありませんでした。

1. イエスはベツレヘムで生まれ、全能の神の御子です。父なる神がイエスを彼らのもとのに遣わされたのですが、彼らは父なる神のことさえ知りませんでした。

D. イエスはこう言われました。「あなたがたは父を知らないが、私は父を知っている。」ここでの「私」という言葉は強調されています。ギリシャ語では、動詞の活用から明らかであったにもかかわらず、イエスはあえて一人称代名詞「私」を用いました。しかし、イエスは強調するためにそうされたのです。

1. 『あなたがたは彼を知らないが、わたし、わたしこそ彼を知っている。わたしが彼から来た者であり、彼がわたしを遣わされたから、わたしは彼を知っているのだ。』

2. イエスはここで、ご自身の神聖な起源を明確に述べられています。すなわち、この地上に来られる前、イエスは父と共にあり、父がイエスを天から地上へ、人々のところへ遣わされたということです。

E. これは、神性に対する非常に大胆に否定の余地のない主張でした。だからこそ、宗教指導者たちは30節でそのような反応を示したのです。見てください。

VIII. ヨハネ7:30；人々はイエスを止められると思った

A. イエスが父なる神からのご自身の神性を、このように大声で大胆に宣言するのを聞いた宗教指導者たちは、直ちにイエスを捕らえようとした。つまり、イエスを拘束し、逮捕しようとしたのだが、それは叶わなかった。

1. ここには、宗教指導者たちのもう一つの誤りが表れています。彼らは自分たちが現場の権威者であり、いつでも好きな時にイエスを止められると考えていたのです。

2. しかし、事実はそうではありませんでした。彼らはイエスを捕らえようとしたが、イエスの「時」がまだ来ていなかったため、誰もイエスに手を下すことはできませんでした。

a. 聖書が「その時」について語る際、それはほぼ常に、カルバリの十字架上でイエスの犠牲的な死の瞬間を指しています。

b. 「その時」という表現はより一般的な意味合いを持っていたのに対し、「その時」は、イエスの逮捕、裁判、鞭打ち、そしてその後の十字架刑を具体的に指していた。

c. イエスが十字架にかけられる時ではなかったため、誰もイエスに手を下すことはなかった。彼らがどれほど懸命にイエスを捕らえようとも、どれほど必死にイエスの口を封じ、排除しようとも、それは叶わなかった。なぜなら、最終的には神がすべてを支配しておられ

、神はすべてのことが神の定めた時と計画に従って起こるよう、必ず導かれるからです。

d. 宗教指導者たちは、自分たちがその場の権威者だと思っていたが、それよりも偉大な権威が働いていたのであり、いかなる人間の反対も、主とその御子に対する主の計画を打ち破ることはできなかった。

B. さて、誰もが誤った結論に至ったわけではなく、31節にあるように、信じた者も大勢いた。見てみよう。

IX. ヨハネ7:31；多くの人が信じた

A. 宗教指導者たちがイエスとその教えを封じ込めようと懸命に試みたにもかかわらず、群衆の中には、すべての点をつなぎ合わせ、イエスについて正しい結論に達し始めている人々もいた。

1. ある人々は、メシアが成すべきことのチェックリストを照らし合わせて、「いや、この人は違う。この人が私たちのメシアであるはずがない」と判断しましたが、他の人々は異なる結論に達していました。

2. 彼らは互いにこう論じ合いました。「もし、イエスが成し遂げたすべてのことを上回ることをする者が現れることなど、果たしてあり得るのだろうか」と。

a. イエスよりも多くの奇跡を行う者が現れるだろうか？ イエスよりも権威と洞察力を持って教える者が現れるだろうか？ イエスよりも愛と憐れみに満ちた者が現れるだろうか？ イエスが行った以上に多くの人々の人生を変える者が現れるだろうか？

b. あらゆる証拠を検討するうちに、彼らはただ一つの結論へと導かれていった。「この人こそが、その方だ。彼が成し遂げたすべてのことを見よ。彼がすでに成し遂げたこと以上に、誰がさらに多くのことを成し遂げられようか。」

c. 驚くべきことは、イエスがその後さらに多くのことを成し遂げられたということです。イエスは他に類を見ないほどの苦しみを受け、全人類のために進んでご自身の命を捧げ、この世の罪を贖い、十字架上で死なれ、そしてご自身を復活させられました。イエスは罪と死に勝利し、恵みによって信仰を通して単に御自身のもとに来る者たちと新しい契約を結ばれ、歴史を通じて数え切れないほどの人々を救われたのです。

3. 彼らの問いに対する答えは、断固とした「いいえ」です。イエスが成し遂げたこと以上のことを成し遂げる者は、決して現れないでしょう。イエスはまさに彼らのメシアでした。

B. そしてその日、多くの人々がイエスをメシアとして信じた。これが、宗教指導者たちの怒りをさらに煽ることとなった。今朝の集いを締めくくるにあたり、本文の最後の節を見てみよう。

X. ヨハネ7:32-36；人々は、いつでもイエスに会えると思っていた

A. ヨハネはここで、ついに宗教指導者たちをパリサイ人や大祭司たち、すなわちユダヤ人のサンヘドリンの一員である者たちであると特定しています。

B. 群衆がイエスについて、またイエスがまさに彼らのメシアである可能性についてささやき合っているのを耳にすると、彼らは直ちに役人を遣わしてイエスを捕らえさせようとした

、彼らは依然として自分たちが現場の権威であり、いつでもイエスを止められると考えていたのです。

1. 主の御心があれば、来週、この箇所を読み進める中で、イエスを黙らせようとする彼らの拙い試みがいかに惨めに失敗し、役人たちが手ぶらで戻ってきたかがわかるでしょう。繰り返しになりますが、その詳細については来週お話しします。

C. イエスは、自分を捕らえようと役人を遣わした宗教指導者たちに対し、こう言われました。「わたしは、もうしばらくの間、あなたがたと共にいるが、やがてわたしを遣わした方のところへ行く。あなたがたはわたしを捜しても見つけることはできず、わたしがいるところには、あなたがたは来ることができない。」

1. 宗教指導者たちは、この言葉が何を意味するのか全く理解できませんでした。彼らは、**いつでも好きな時にイエスに会える**と思い込んでいた**のです**。そして、それもまた、彼らが信じ込んでいたもう一つの誤りでした。
2. 彼らは互いに議論し合い、もしかするとイエスは自分たちの元を離れて、「離散の民」——ギリシヤ人の間に住む海外在住のユダヤ人、すなわち非ユダヤ人、異邦人のところへ行くのではないかと考えた。
3. しかし、イエスが言おうとしていたのは、そんなことではなかった。イエスは、将来、御父のもとへ昇天することについて語っていたのだ。イエスと共に過ごす彼らの時間は終わりに近づいていた。まもなくイエスは十字架にかけられ、その三日後に復活し、さらにその40日後に御父のもとへ昇天することになる。
4. 彼らに残された時間は少なくなっていた。この日は、彼らに神が臨在された日であった。彼らはメシアが来る日を待ち望んでいたが、そのメシアは今、彼らの目の前に立ち、教えを説き、彼らの心に訴えかけようとしていた。しかし、彼らはイエスをメシアとして受け入れようとはしなかった。
5. その後、イエスが勝利の入城としてエルサレムの都に入られる際、涙を流しながら入られることになる。ルカによる福音書19章にはこう記されている。「イエスは都に近づかれると、その町を見て、それを嘆き、こう言われた。『もし、あなたたちも、とりわけこのあなたの日に、あなたたちの平和につながることを知っていたなら！ しかし今、それらはあなたたちの目から隠されている。やがて、敵があなたを取り囲み、土塁を築いて四方から包囲し、あなたと、あなたの中にいるあなたの子供たちを地面に平らにしてしまう日が来る。彼らは、あなたの中に石を一つも石の上に残さないだろう。それは、あなたが、あなたを訪ねてくださった時を知らなかったからだ。』」 **(ルカ19:41-44)**

D. イエスは、この聖書の箇所で彼らに懇願しておられました。「あなたがたがわたしを求め、わたしを慕う日が来るでしょう。しかし、その時には、わたしを見つけることはできないでしょう。なぜなら、わたしは父のもとにいるからです。そして、わたしが行くところには、あなたがたは来ることができないのです。」

1. イエスは、ご自身の前の世代がいずれ滅ぼされることを知っておられました。彼らはローマ当局に包囲され、都は陥落し、神殿は破壊され、人々の生活は破滅するでしょう。
2. 人々はメシアを求め、切望するでしょうが、彼はそこにいないでしょう。彼がそこにいないのは、すでに彼らが目の前に現れ、自らを明らかにしたにもかかわらず、彼らが彼を拒絶したからです。彼らは

イエスとは一切関わりたくなかったのです。彼らはイエスを軽蔑し、虚偽の告発を行い、イエスが犯してもいない罪のせいで、十字架に架けて死なせたのです。

3. イエスをメシアとして信じる信仰が欠けていたため、彼らはイエスのもとへ行き、イエスと共にいることができないのです。これこそが彼らの瞬間でした。これこそが彼らの時であり、メシアからの「訪れの日」だったのです。しかし、彼らはそれを逃してしまっていたのです。
 4. 宗教指導者たちは、いつでもイエスに近づくことができると考えていましたが、それは間違いでした。**彼らの時間は残り少なくなっていました**。彼らのメシアが彼らと共にいるのはあと6ヶ月ほどしかなく、イエスを正しく見分ける機会は、すべり落ちていっていたのです。
- E. 来週、主の御心があれば、ヨハネによる福音書第7章の記述を続け、仮庵の祭りの終わりに何が起こったのかを見ていきます。もちろん、皆さんもいつでも先読みをして、主があなたに語りかけてくださるよう待ち、来週の聖書の学びに向けて心を整えておくことができます。

XI. 結論

A. 祭りの場で見られた多くの誤った考えや、イエスがそれら一つひとつをどのように論破されたかを考えるとき、今日でもまさに同じ誤った考えが信じられ、受け入れられていることを思わずにはいられません。

1. ある人々は、イエスが自分たちが重視し、追い求めているような「資格」を欠いているという理由で、イエスを拒絶します。
2. また、イエスが自分たちの罪を突きつけるからという理由で、イエスを拒む人もいます。
3. また、イエスについてすべてを知っていると思い込んでいる人もいますが、イエスと個人的な関係を持つことがどういうことかを知りません。
4. イエスを黙らせたり無視したりできると信じている人もいれば、イエスに応答するのにいくらかも時間があると思い込んでいる人もいます。

B. しかし、これらはすべて、人々が信じてしまっている誤った考えに過ぎません。

1. イエスは私たち一人ひとりの個人的な関係を切に望んでおられ、それを惜しみなく私たちに与えてくださいます。もし私たちが信仰によってイエスのもとへ歩み寄り、十字架の上で成し遂げられた御業を信頼するならば、私たちの時間は無限ではありません。イエスに応答する機会がもはやない日と時が必ずやってきます。
2. 私の祈りは、私たち全員がイエスの開かれた招きに応え、イエスとの関係を深め、成長させ続けようとする者となることです。アーメン？ アーメン。祈りましょう。